

+

「アメリカを旅して」

中学二年 R・F

はじめに

私が中学二年生の夏、アメリカに二週間程旅行をすることになった。海外に行くのは十年ぶり。しかし、私はアメリカに行くよと言われても、小学生がディズニールランドに連れて行ってあげる、と言われた時のようなテンションにはなれなかった。将来は、英語圏で仕事がしたいと思っていたのに、なんでこんな無関心でいられるのだろうかと自分でも不思議だった。

アメリカ到着 ロサンゼルスの旅

ロサンゼルスの空港に着いて、私は両親から「海外は、日本ほど治安が良くないから貴重品管理をちゃんとしてよ。」

と耳にたこができる位聞かされていたことを思い出した。だから私はとっさに、リュックのチャックを固く握っていた。私は、何も悪いことが起こりませんようにと祈りながら、道を進んで行った。レンタカーを借りる時、スタッフの女性が衝撃的だった。なぜなら、ガムを噛みながら接客をしていたからである。日本ではありえない光景だった。でも、愛想が悪かった訳ではなかった。

この後、車でハリウッド、ディズニールランド、サンタモニカ、ビバリーヒルズを三日間かけて観光した。ビバリーヒルズでは富裕層が住んでいると聞いていたが、やはり一億円もする車など高級車が沢山走っていて圧倒されたが、その一方ではお金を恵んでくださいと汚れた服装で地面に座っている人もいて、複雑な気持ちになった。

国立公園巡りの旅

ラスベガスに到着した。飛行機からの景色はまるで砂漠の中に街があるようだった。空港内にもスロットマシーンがあつて、さすが

ギャンブルの街だと思った。

次の旅は、国立公園を巡る旅。インドア派の私にはちよっとキツイ旅かなと思われたが、親が私の意見も聞かず引っぱり出す形となった。私たちは、五つ国立公園を巡った。

ザイオン国立公園

この国立公園は、緑や動物も多く世界最大級の一枚岩もあったりして圧巻だった。シャトルバスに乗ると、シカや一枚岩など景色を見て奥の方まで行った。そこから、*Riverside Walk* という道を三十分程歩いて、バージン川の中を川上りして行くコースだ。ちょっと川遊びするレベルで来ていたので、夢中になってどんどん奥まで来てしまい途中でしまった！と思ったが、フレームに入りきらないぐらいの大きさの山々を見て、疲れも吹っ飛んだ。下っている途中、深みに足をとられ不安定な体勢でゆらゆらしていた時に観光客から

「What a funky dance!」

と言われこっちまで笑ってしまった。その後、他の観光客から私の履いているサンダルを見て

「Be careful!」

と親切に声を掛けてもらったりもした。日本人からあまりこうやって声を掛けてもらうことなどあまり無かったので、外国の人は気さくでフレンドリーな方もいるんだと思った。

ブライスカヤニオン国立公園

ザイオンとは違って緑は少なく、赤茶色の岩の剣が地面から何本も突き出ているようだった。まずは、サンセットポイントから下って行くことにした。足元は砂で滑りやすく、断崖絶壁で通路が狭く柵もなかったのもので、怖かった。上から落ちてきた岩も所々にあってよく考えたら、命懸けのハイキングだと思った。柵が無いのは、景観を損ねてしまうからだろう。どンドン下って行くと、突き出た剣と剣の間に吸い込まれていくようだった。ずっと進んで行くと、

看板があつて、この看板は公園内に複数個あるのでそのうちの三個、看板がある所へ行って写真を撮りビクターセンターに持っていくとちよつとしたプレゼントが貰えると書かれてあつた。ぜひ挑戦してみようと思ひ、やってみることにした。とりあえず二個目の看板に向かつて歩いて見たのだが、実はこのコース、上級者向けのコースだったらしくとても大変だつた。この日の気温は約二十五度で朝は肌寒く、パーカーを着ていないと耐えられなかつたのだが、歩いてゐるうちに半袖短パンの姿になって、少々汗をかいてゐた。こんなに楽しめるとは思つてもいなくて予想外の展開になつた。

三個目の看板への道は中級者向けのコースで先程と比べれば、楽勝かなと思つてゐたものの、やはり大変で自然をなめてはいけなかつたと思つた。看板の写真を三個揃えて、ビクターセンターへ行った所、ブライスカニオンの写真が載つてゐる葉を貰うことができた。ぜひ使いたい。この日は、合計で十キロ歩いて六十階分上下した。

アンテロープキャニオン

見学の予約を事前に入れてなかつたので朝一番で窓口まで行つたものの、四時のツアーしか空いてゐなかつたため、仕方がないので四時のツアーに予約して、モニュメントバレーを観光してから二時間かけて戻つた。しかし、三時のツアーだと相手にしてもらえず、割と穏やかな父が強い口調で

「今朝早く四時のツアーに予約を入れ戻つて来ると話したはずだ。」と言ふと思ひ出してくれて、すぐに取り合つてくれた。私は、この言い合いの光景を見て驚いてしまった。日本人がこんな強い言い合いをしているのはあまり見たことがない。しかし、私も四時だと聞いていたし、物事をきちんと自己主張することは大事だと思つた。アンテロープキャニオンまでの道のりは、皆で車の荷台のような所に乗つて行つた。中はとても涼しく砂はキラキラしてゐた。所々光が差し込んでゐる所や真つ暗な所もあり、幻想的だつた。岩の形を人の顔に見立てたりして面白いなと思つた。世界にはこのような場

所もあることを知り、世界は広いなと思った。

モニュメントバレー

ドライブで向かう途中、高さ三百メートルもあるビュートと呼ばれる太い柱のようなものが見られた。だんだん砂漠になってきて、よく見る西部劇の風景だ。ブライスキャニオンと同じで緑や動物が少なかったが、モニュメントバレーのような沢山の剣が地面から突き出ているようではなかった。ビュートの数は少なく、点々としていた。あまり日陰はなく真上からじりじり暑さを感じた。道を少しドライブしてみると、車の内はガツタンゴットンと揺れて、アトラクションに乗っているようだった。遠い昔にタイムスリップしたような気分だ。

グランドキャニオン国立公園

国立公園巡りの旅は終盤を迎え、ここグランドキャニオン国立公園は私たちが巡る最後の公園だ。グランドキャニオンは標高が高いためかとても涼しく気持ち良かった。ここは、緑や動物も沢山いるが、ブライスキャニオンやモニュメントバレーのような赤茶色だけでなく、時間や太陽の位置によって色がどんどん変わっていく岩や地面もあった。私はこの光景を見て、ここが世界遺産だということとても納得できたような気がした。ビクターセンターでは、ジュニアレンジャープログラムというイベントがあって、私も参加してみることにした。ジュニアレンジャープログラムとは、グランドキャニオンやその他の国立公園のことを理解し多くの人に知ってもらい、将来的に今の状態を守っていくためのプログラムだ。いくつかのミッションがありクリアしたらジュニアレンジャーの賞状とバッジが貰える。ミッションは、グランドキャニオンを五感で感じたりスケッチをしたり、レンジャーの話を聞いたりするという内容だ。レンジャーの話の時、小学生ぐらいの子が多かったが私にとって英語が難しくなかなかな理解することが難しかった。何枚か見せられ

た写真と言っていることを頑張って聞き取ってなんとか理解することが出来た。この後無事にミッションを終え、ビジターセンターへ行き無事にミッションを終えたことを報告するとシールやバッジ、賞状を貰った。賞状の中にこのような事が書かれてあった。

Junior Ranger Pledge

I promise to discover all about Grand Canyon National Park and to share my discoveries with others.

I pledge to enjoy and protect Grand Canyon and all national parks, and to be a friend to my planet Earth.

ジュニアレンジャーの誓い

私はグランドキャニオン国立公園について発見しつくすことを約束し他の人と分け合うことを約束する。

私はグランドキャニオン国立公園やすべての国立公園を楽しみ守ることを誓い、私の惑星 地球と友達になることを誓う。

レンジャーの話の時、レンジャーさんはゴミが沢山捨てられているグランドキャニオンの光景を見てこの状態はダメだと思い、レンジャーになって観光客の皆に話をするようになったそうだ。私もこのように自分のやりたいことを見つけていきたい。

国立公園巡りの旅を終えて

グランドサークルと呼ばれる国立公園がある地域は田舎だけれども、私が行ったプールがあるホテルのほとんどにはプールリフトがあって、身障者でも楽しめる設備があった。また、とあるレストランにはお子様メニューがない代わりに五十五歳以上対象のシニアメニューがあった。アメリカは、身障者やお年寄りに優しい国なんだろうと思った。

買い出しのために、スーパーにも立ち寄ったが、日本のように小売りではなく、パックでしかもサイズが大きくて私たちにとっては不便だった。驚いたのは、バケツサイズのアイスクリームだ。とて

も大きくて絶対食べきれないし途中で飽きてしまうと。よくよく考えたら、冷凍庫に入りきれないと思った。お得なことに、日本だとハーゲンダッツ一個、二百三十円ぐらいだったのが、日本より少し大きいサイズで一ドルぐらいだった。なので、買ってみることにした。しかし、レジでスプーンを貰えなかったのでコンビニまで行って貰いに行ったが、蓋の裏にスプーンが付いていて、ショックだった。日本だと

「スプーンは要りますか？」

と聞いてくれるが、まさか蓋の裏に付いているとは思わなかった。アメリカと日本でのサイズ感覚が違う、そして日本は親切すぎると思った。

ラスベガス

空港に近いホテルに泊まった。私が泊まったホテルの周りにも沢山のホテルがあって、お城のようなホテルもありユニークだった。私たちは、古代エジプトがテーマのホテルだ。ホテルの中にもカジノがあつて、スロットマシンをやっている人、ブラックジャックやポーカーなどをやっている人もいて驚くものばかりだった。私は元々、ブラックジャックやポーカーのルールを知っていたが、もし私が大人になってもやりたくないと思う。

今まで国立公園巡りで服装がジャージやジーパンだったので、ワンピースに着替えてラスベガスの街を観光した。外へ行くとテーマはニューヨークでラスベガスな感じがしなかった。妹が *m&m's* のお店に行きたがっていたので行くことにした。道に迷っていたら、とある外人の男性と女性が

「私たちもそっこの方面へ行くのでぜひ一緒に行きましょう！」

と声を掛けてくれて一緒に行くことにした。とても親切だと思った。日本だと道に迷っていてもつい他人の素振りをしてしまうが、こんなに親切に声を掛けてくださって、異国の地で不安だったのだが、とても温かい気持ちになった。別れる時に握手をして別れた。

m&m's ではどれも大きく日本では見たことがなかったような物が沢山あった。例えば、大きい透明な円柱の中に色別で沢山のチョコレートが入っていたり、入りたい文字を直接チョコレートに入力できる可愛い柄の機械があったりした。やはり、日本と大きさの感覚が違って驚かされてばかりだった。この街は、ニューヨークで有名なお店もあった。ショッピングモールに入ると、すぐ目の前にチョコレートでできたカラフルな自由の女神があり、チョコレートのお店が沢山あった。ショッピングモール内の香りは、日本にはあまりないアメリカな香りがした。この香りを嗅ぐとアメリカにきた感じがする。この日は、中華を夜ご飯として食べて、ホテルに帰った。ガイドブックに書いてあったのだが、ラスベガスのホテルはあえて工夫をして、カジノに行かせるようにするそうだ。その工夫は、ホテルの部屋の中に冷蔵庫を置かなかったりルームサービスを高額にしたり、テレビなどのインターネットサービスを充実させなかったりしてカジノへ行きたいと思わせるそうだ。父も夜中、カジノの音で目を覚まして行こうかなと思ったそうだ。国立公園とは違う大人な雰囲気を感じることができた。

サンフランシスコ

私たちは、サンフランシスコに着いてシリコンバレーを巡った。私たちは一つの大学と四つの企業に行った。

スタンフォード大学

私たちは、スタンフォード大学のブックストアへ行った。外観はまるで住宅地みたいな大学の建物でもとても広大な敷地だった。ブックストアでは、Stanfordと書かれてあるTシャツやノートなどの文具があった。この大学のブックストアは生徒が買う教科書や参考書だけでなくTシャツや文具が沢山あって観光地でもあるんだと思った。

シリコンバレーの発祥の地であるHP(ヒューレット・パッカード)

ガレージも見に行った。普通のガレージでこの中で会社が作られたと考えると、夢はどんなに大きくてもどんな環境であれ掴むことができるということ教えられた気がした。少し私にも勇気が貰えたような気がした。

フェイスブック

中には入れなかったが、知り合いがいれば入れるそうだ。その従業員から *Face Book* と書かれたストラップを貰った。この会社は、外観は広大なスペースに低めのビルが沢山建っていた。日本だとスペースが狭い所に高いビルが密集しているが、アメリカでは広大なスペースがゆったり使われていた。

インテル

中のミュージアムに入って色々な体験ができた。例えば、写真を撮ってパソコンの壁紙にできるようなソフトやパソコンの仕組みをゲーム感覚で学ぶことができたりと面白いものが沢山あった。

外観は、フェイスブックの会社と似ていて広大でゆったりとしていた。しかし、相違点是一部ミュージアムの場所が出入り自由でインテルオリジナルのキャラクターやキャラクターを題材としたグッズが販売されていた。

グーグル

この会社は、テレビでも見ていたがとても自由でオフィスに滑り台があったりすると聞いたことがあって、どんな自由な会社なのだろうと少しわくわくしていた。予想は裏切らなかった。駐車するとグーグルカラーのカラフルな自転車が鍵もついていなく普通に置いてあって驚いた。逆に、色が明るいカラーなので目立って、盗みづらいのかもしれない。やはりここの外観も広大でゆったりと使われていた。敷地内には野菜が植えてあったり、休めるカラフルなベンチが沢山あったり、噴水があった。芝生では社員の方が遊んでいた

りしていた。予想通り自由でカラフルだった。グーグルは福利厚生
が充実していて、社内で食べるご飯は全て無料だそうだ。

聞いた話なのだが、上司から

「いままで、何回失敗をしてきたか？」

と聞かれ、部下は

「何も失敗などしていません。」

と言うと他社では、まさか怒られることはないだろう。しかしグー
グルだと

「いままで何も失敗をしていないのは挑戦を何もしてこなかった証
拠だ。そんな社員はうちにはいない。五回失敗したら、私まで
報告をするように。」
と言われるそうだ。

普通だと、仕事では失敗をするなどというのが普通だが、失敗を恐
れずに挑戦することによって、新製品や世界を変える発明ができる
のかもしれない。挑戦をするということは、口にするのは簡単だけ
れど実践するのに躊躇してしまう。でも、上司からこの言葉を貰う
と挑戦することに背中を押されている感じで勇気が出る。だから、
新製品や世界を変える発明品を作り出して世界でも上位の会社にラ
ンクインできたのだと思う。

アップル

この会社も広大な敷地でゆったりとしていて中には入れなかつ
たが、いたって普通の外観だった。グーグルと比較すると、改めて
グーグルはなんて自由なのだろうと思った。

フィッシュマンズワーフ

サンフランシスコでも有名な場所である。私たちが泊まっていた
ホテルを出て、ケーブルカーのフィッシュマンズワーフ方面の停車駅
から乗った。そこは、すごく急な坂で驚いた。ケーブルカー内の外
のベンチに座ったら風が気持ちよくて、手摺につかまって立つとこ

れぞサンフランシスコだと思った。

フィッシャマンズワーフに着いて少し歩くと、前回アメリカノートで調べたゴールデンゲートブリッジとアルカトラズ島が見えた。調べた物を実際に見ることができて嬉しくなった。そして、サンフランシスコ名物のカラマリとクラムチャウダーが入ったパンを食べた。そしていままでできなかったショッピングができて良かった。

帰りに、ビバリーヒルズと同じで汚れた服装で地面に座っている人がいた。しかし、ビバリーヒルズとは違い一億円の車や高級なお店が並んでいた訳ではないので、観光客目当てなのかもしれない。

父の体験談なのだが、学生時代にニューヨークに行った時とある浮浪者とちよっと擦れただけなのにビンを落として

「これは、高級な酒なんだぞ！金を払え！」

と言われ、本当に困っていた。そのビンの中身は高級な酒でもなくきつとどこかの水道水でビンはどこかで拾ったのだろう。そしてら通りすがりの外人の方が

「高級な酒じゃないだろう！」

と浮浪者に言って、

「もう大丈夫だから行っていいよ。」

と父に言って助けてくれたそうだ。

実際に父もその時一人でいて怖かったそうだ。私たちも実際、浮浪者に

「Change please」

と言われたが、聞こえなかった振りをしていたら何処かへ行った。とても怖い経験だった。次回海外に行く機会があったら気を付けたい。

さいごに

私はアメリカ旅行へ行く前は無関心だった、そしてそのことは私にとって不思議であったと前述したが、その理由は終わってから、明確ではないもののなんとなく分かったような気がした。それはきつ

と住み慣れた日本を離れて、アメリカに行くのが不安で嫌だと思っ
てしまったからだと思う。

人種も文化も生活習慣も食べ物もと相違点を挙げていくときりが
ないが、とにかく違いが多すぎるアメリカ。私はアメリカとの文化
の違いを感じて、いままで日本でやってきた当たり前のことが、ア
メリカでは違うのだなと思った。アメリカについては旅行雑誌やイ
ンターネット、テレビなどでは調べていたのに実際に行く画面や
図面を飛び越えて感動した。この旅行に来ていわゆるカルチャーシ
ョックというものを感じたのだ。割と知っている国だと自負してい
たが想像を超えた。そして、他の国はどんな国なのだろう、どんな
文化や食べ物なのだろう、どんな生活習慣なのだろうともっと知り
たくなった。

だから、将来的に、世界に関連できるような人、職業に就きたい
という思いが強くなった。